神様の愛を正しく知り
神様の求めに従う

申命記10章12～22節
2021年5月2日
松田 基子 師

呉教会の表の看板には、
『神は愛なり』
と記されています。 わたし達が神様に一番求めていることは、神様に愛されることです。
しかし、わたし達が神様に求めている愛と言うのは、自己中心で、神様が与えて下さる愛とは、ほど遠いものではないでしょうか。 神様への信仰とは、わたしが神様に**求める愛ではなく**て、神様が**与えて下さる愛**を、これこそ真実な愛だと受け取って、心から感謝し、神様に全信頼して**従って行く**ことです。

さて、神様がお与えになる愛と、人間が神様に求める愛が、如何に違っているか、その人間の履き違いに、民の心を神様の愛の心に従わせようと、生涯を捧げたのは、イスラエルを出エジプトさせ、40年の荒れ野の放浪生活を指揮し、約束の地の入口まで導いたモーセでありました。
ところが、神様は、モーセの使命をそこまでとお決めになりました。 モーセは心底、神様に信頼し、神様の栄光、御心がその身に成されることのみを、心から願っていましたので、その事を従順に受入れました。 ただ、死期を覚悟したモーセが、一番心配したことは、
『約束の地に入る事を許された第二世代が、せっかく荒れ野の40年の生活で身につけた信仰を、持ち続ける事が出来るかどうか』
ということでした。 これから戦い取って行く国々、それは自分達より、遙かに優れた生活、勝った戦力を持っています。 しかし、彼らは偶像に仕え、罪と悪に満ちて、大地を汚しているのです。

そのために神様は、彼らと戦わせて、勝利させ、偶像を除き、神様を畏れ敬い、神様の愛に生きる神の民の国を造ることを御計画なのです。
しかし、それを得るためには、自分が神様に求める自己中心の愛を捨てて、神様が与えて下さる愛を、真実の愛として受け取り、神様の御言葉に従うことです。 第二世代は、これから入って行く約束の地カナンで、そのように生きることが出来るのでしょうか。

ところで、神様は何故、イスラエルをご自身の民に選ばれたのでしょうか。 申命記7章6節から、モーセは次の様に言っています。
「あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の表にいるすべての民の中からあなたを選び、ご自分の宝の民とされた。 主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。 あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。 ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもって、あなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。」

ここから分かりますことは、神様は先祖との誓いもさることながら、人の最も低きを、つまり、人間の間では、人間として認められない価値なき者を愛されるお方だという事です。 神様の愛とは、人間の様に、価値や、条件を求めるものではありません。 ここには**主が心引かれて**、あなたたちを**選ばれた、とあります**。つまり、それは神様が価値なき者に、一方的に憐れみを掛けられたと言う事です。 ここが神様の前に置かれた、**人間の原点**です。
人間はこの立ち位置から決して離れてはなりません。 そこから離れる時、人間は傲慢で、自己中心になり、神様に対して、自分の望む愛し方を求めるのです。 出エジプトをしてきた第一世代が、正しくそうでありました。 申命記9章の表題は、『**頑なな民**』と記されています。 その姿はイスラエルの民に限った事ではありません。
全ての人間の姿です。

9章6節に、モーセは民に対して、
「あなたが正しいので、あなたの神、主がこの良い土地を与え、それを得させてくださるのではないことをわきまえなさい。 あなたはかたくなな民である。 あなたは荒れ野で、あなたの神、主を怒らせたことを思い起こし、忘れ

てはならない。 あなたたちは、エジプトの国を出た日からここに来るまで主に背き続けて来た。」

と言っています。 顧みて、モーセが律法授与のために、シナイ山頂に登っている間、民は、子牛の鋳造を造って

「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き登った神々だ。」

と叫び、民は座って飲み食いし、立って戯れたのです。 彼らの反逆は続きました。 9章22節に、タブエラでは、民の激しい不満の故に 主の火が降り、宿営の端から火が上がりました。マサでは、飲み水がないと呟きました。キプロト・ハタアワでは、(その名は貪欲の墓という意味ですが)、肉が食べたいと呟き、神様が降らせてくださったウズラを貪欲に食べ過ぎた人々が、疫病に罹って死にました。 23節には、

「主がカデシュ・バルネアからあなたたちを遣わし、

『上って行って、わたしが
与える土地を取りなさい。』

と言われたときも、あなたたちの神、主の命令に背き、主を信頼せず、その声に聴き従わなかった。 主があなたたちをお選びになって以来、あなたたちは背き続けて来た。」

とモーセは嘆いています。

この第一世代は、神様の愛を、全く履き違えていました。

『神様とは、自分達の願いを
叶えてくだされば良いのだ。』

と思い込んでいました。 しかし、そういう生き方が、自滅の道であったことは、第一世代自身が刈り取った人生でした。

人間の本分は、神様の愛を受ける資格の無い罪人を、神様の一方的な憐れみによって、愛されていることに、驚きをもって感謝し、自分もまた神様を畏れ、愛する表れとして、神様に全信頼して、神様の御言葉に聞き従うことです。 神様はそのような人間を育てるために、第二世代を訓練されました。

モーセは第二世代の人々に、申命記8章1節から言っています。

「今日、わたしが、命じる戒めをすべて忠実に守りなさい。 そうすれば、あなたたちは命を得、その数は増え、主が先祖に誓われた土地に入って、それを取ることができる。」

2節から、

「あなたの神、主が導かれたこの40年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。 こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。 主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。 人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」

神様の御言葉に**信頼**して**生きる**事に**こそ**、人間の**本分**、人間の**価値**がそこに**ある**のです。

そこに人間の一番の幸せがあるのです。

「この40年の間、あなたのまとう着物は古びず、足が腫(は)れることもなかった。 あなたは、人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練される事を、心に留めなさい。」

と命じています。

わたし達は神様の前に、自分の思い、我がままを押しつけてはならないのです。 モーセがここで言いたかったことは、神様の**愛を正しく知る**という事は、神様に全信頼し、その御言葉に賭けて**従うこと**によって、苦難の先で神様の**愛の真実**に**出合**い、それが**分かる**と言うことです。 人はそこまで行かなければ、神様の愛を正しく**知り**、神様に**従う**事はで**きない**のです。

神様は、そこに人間の最大の幸せがある事を、実感させるために、神様の御言葉に賭けて、神様に信じ従い切る訓練を、荒れ野の40年の放浪生活の中で、第二世代に教え、育てられたのでした。しかし、 モーセは第一世代を導いて来た経験から、人間が、如何に自己中心で、この世の誘惑の前には弱く、神様に聴き従おうとはしない、頑なで心から神様を**畏れ**、**敬い**、**愛す**ることを**しない**、人間の**生来の性質**を、よくよく知っていました。

これから入って行くところは、文化や技術は、

自分達よりは遙かに優れています。 しかし、偶像を拝み、つまり、自己の欲求にノーを言わない神々を拝んで、自己の利益を追い求め、弱者を虐げ、罪と悪が蔓延している世界なのです。 それ故に神様はイスラエルによって、その地を新しくしようとされているのです。 人間が如何にこの世のものに弱いか、この世のものを求めるのか、その事をモーセは第二世代に対しても危惧しました。 そこでモーセは、10章12節から、第二世代に語り掛けています。

「**イスラエルよ、今、あなたの神、主があなたに求めておられることは何か。**」

イスラエルは神様の愛と憐れみによって、奴隷の身から救い出され、神の民に選ばれ、育てられ、愈々神様を主とする国を立て上げて行くのです。 そのためには、自分達の思い、願いではなく、神様が**求めておられること**を**聞かなければ**なりません。

そこでモーセは言います。

10章12～13節に、

「**ただ、あなたの神、主を畏れて**」

とは、神様は創造主として、全知全能で、限りなく尊く、聖く、正しいお方ですから、罪ある人間が近づくことは出来ません。 人間は**それ程の畏れ**を持って、**平伏すべき**です。 次に、

「**そのすべての道に従って歩み、**」

とありますのは、協会共同訳では、

「主の道を何時も歩み、主を愛し」

と訳されています。 主を**愛することなくして**、主に心から**従うことは出来ません。**

「**心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え、**」

つまり、全身全霊をもって主なる神様に仕え、

「**わたしが今日あなたに命じる主の戒めと掟**（律法）**を守って あなたが幸いを得ることではないか。**」

と勧めています。

モーセは、このような生き方が、真の**幸いを得る生き方**であると教えています。

モーセは第二世代が、約束の地に入っても、この世の物欲に惑わされず、偶像に走ることなく、主なる**神様のみを**畏れ敬い、**愛し**、**従う**様に。

『**そこにこそ**、第二世代の**幸いがある**。』

と言う事を教え諭しました。 そして、第二世代が神様からどれ程の愛を戴いているかを、10章15節から語っています。

「**主はあなたの先祖に心引かれて彼らを愛し、子孫であるあなたたちをすべての民の中から選んで、今日のようにしてくださった。**」

今、神の民に選ばれていることは、神様の驚くばかりの、愛の故なのです。 その**神様の愛**の偉大さを**知って**、その神様の**愛に応える**ことこそ、第二世代の**成すべき務め**です。

そこで、モーセは、10章16節に言います。

「**心の包皮を切り捨てよ。二度とかたくなになってはならない。**」

包皮を切ると言うのは、割礼のことです。 身体の割礼は、神様の民となる儀式でしたが、そこには当然、清められて、神様に従うと言う、献身の意味が込められていました。 第一世代は、出エジプトの前に、割礼を受けて出て来ましたが、彼らの生涯は、神様に逆らい続け、割礼の意味を成しては居ませんでした。 身体にどんなに割礼を受けても、神様への献身、神様への従順がなければ無意味です。 心にこそ、割礼が必要です。 自己中心、不遜という心の頑なさを、**切り捨てること**こそ、**第二世代に求められ**ていることでした。 16節に、

「**二度とかたくなになってはならない**」

そのことがモーセの**切なる願い**でした。

自分達を愛し、選び、導いていて下さる神様が、どんなお方なのか、イスラエルの民は偶像に満ちた世界の中で、神様の真の姿を、十分には知って居ませんでした。 そこでモーセは、17節に、

「**あなたたちの神、主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして勇ましく恐るべき神**」

と言っています。 唯一無比なる神様であることをこの様に表現していますが、人間の延長線上の偶像の神々とは、完全に違っていると言う点について、

「**人を偏り見ず、賄賂を取ることをせず**」

つまり、完全で正しい審きをなさるお方だと

言っています。 そして、憐れみ深い神様は、18節に、

「**孤児と寡婦の権利を守り、寄留者を愛して食物と衣服を与えられる。**」

つまり、神様の目は、常に最も弱い立場の人々の上に注がれ、彼らが生きていくことが出来るように、人々に働き掛けておられるのです。
ですから、19節に、

「**あなたたちは寄留者を愛しなさい。 あなたたちもエジプトの国で寄留者であった。**」

と勧めています。 寄留者の苦しみは、経験した者が一番分かる筈です。 そんな自分達を、神様は憐れみ、助け出して下さったのですから、神様のその愛に応え、今度は自分達が、神様の手足になって、孤児や寡婦、寄留者を助ける番です。

この神様を信じて生きる生き方は、20節に、

「**あなたの神、主を畏れ、主に仕え、主につき従ってその御名によって誓いなさい。**」

と命じられています。
詩編15篇4節に、口語訳では、

「**誓った事は自分の損害になっても変えることなく**」

と訳されていて、また、協会共同訳では、

「**不利益な誓いでも、翻しはしない。**」

とあります。 新共同訳には、この箇所が表されていません。 人は神様の前に真実に生きること無しに、人に対しても真実に生きることは出来ません。 21節に、

「**この方こそ、あなたの賛美、あなたの神であり、あなたの目撃したこれらの大いなる恐るべきことをあなたのために行われた方である。**」

とあります。

神様は如何に大きな愛をもって、先祖から、今に至るまで、民を祝福して下さったことでしょうか。 ヤコブの一族は、僅か70人でエジプトに移住しましたが、愛と真実を尽くして下さる神様は、約束通りその子孫、イスラエルの民を、天の星の様に数を増して下さいました。 そうして、導かれて来た、第二世代が、今度こそ、神様の愛と真実を正しく受け取って、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして全身全霊をもって、神様を畏れ、聴き従って行く番です。

しかし、人間の愚かさは、また、同じ罪を繰り返して行きます。 その罪の歴史を贖うために、神の御子イエス様が、人となって、この世に生まれ、十字架に、全人類の罪を贖って下さいました。 神様は独り子まで人類に与えて、ご自身の愛を示されました。 わたし達は、この神様の真実の愛を、どれ程、正しく、深く受け止めているでしょうか。 自分に試練や困難が襲いかかって来ますと、神様の愛を疑い、呟いてしまいます。

独り子さえ賜った神様の愛を、はっきりと心に刻み、神様の愛を決して疑うことなく、そこには必ず神様の意味があり、**全ての事**は**相働きて、益となる**ことを**信じ**、**忍耐**して、**御言葉に聞き従い**、どの様な時も、神様を**讃美する信仰**の**生涯を全うする事**、それが今、神様がわたし達に**求めておられる生き方**です。 わたし達は、その生涯を歩ませて下さいと祈り求めて行こうではありませんか。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様
あなた様は、ご自身に背き、自己中心に生きる私達人類を、尚も愛し、御子イエス・キリストを、人類を救うためにお与えになりました。

その深い愛を悟り得ない罪深いわたし達をお赦し下さい。

どうぞ、ご自身のその深い大きな愛を**正しく知り**、その愛に**応えて生きる**ことが出来るようにわたし達を清め、主への愛と献身に導いてください。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。